53

中国伝統医学と道教（第二十六回）
陰隲文

吉元昭治
吉元医院

陰隲とは陰徳のことで、「陰隲文」（又は陰隲）は「文昌帝君陰隲文」というのが正しく全文わずか六三五字からなるものである。前回総会で発表した「太上感応篇」のつづきなようなもので、「功過格」や次回にのべる「関聖帝君覚世真経」などと共に善書の一部になっている。しかし明代袁了凡の「陰隲録」とは違うものである。

この起源、判っきりした著作は判っきりとしていないが、すでに宋代頃からというのもあるが、明末、清初のいわゆる士大夫―官吏や知識人の間から梓潼帝君、文昌帝君信仰がおこり両者は一つになり文昌帝君がのちに盛んとなり、明末頃に三教合一の気運の亢まりと結び、さらに金丹道の三教兼修にも影響され次第に現在の姿となったと思われる。

梓潼帝君は道教の神位ランクでは比較的高い位置にある。元来四川省剣州七曲山（梓潼県）の地神で、晋朝に仕えて戦没した張悪子（張亜子）とされもと雷神でもあったという。人々はその死をいたんで祀ったが次第に人々の信仰が集まり廟がつくられ唐代以後になると蜀地方の守護神になった。一方では怨霊になりしばしば霊験を現わし七十二とか九十七代といわれるように姿を替え、殊に科挙を受ける知識人の信仰を集め、王安石のように宰相の位まで昇った者もいたという。元代となると星神でもある文昌帝君と合祀され、学問の神として崇められると文昌帝君の名の方が盛んとなり、清代にはさらに旧暦二月三日の文昌帝君の誕生日には各地で盛大な祭りが行われるようになった。

一方の文昌帝君は『史記　天官書』によると北斗七星の第一星魁星の近くにある文昌六星を神格化したもので、さきの梓潼帝君が元の仁宗から「輔元開化文昌禄宏仁帝君」と追贈されると梓潼、文昌帝君は同一神とされるようになり、文昌帝君は学問の神様になり、

恰も我が国の天神信仰のようになった。しかし士大夫―科挙を目ざす―官吏になるための願いを捧げる神でもあった。またこの神の信仰の一つに「惜字」「敬惜字」というのがある。これは文字を書いた紙を粗末に扱うと、文章や学問の神の文昌帝君から罰を下され、学問成就もおぼつかなくなる。そこで文字を書いた紙、新聞や雑誌などを敬して焼くことになる。学校、孔子廟、文昌帝君廟にある「字沪」「字紙亭」「敬字亭」などというものがこれで、一日中焼かれた紙の煙がたえない。

ところでこの「文昌帝君陰隲文」は「蔵外道書」第十二巻に、「文昌帝君陰隲文」「文昌帝君陰隲文注」「陰隲文像注」「陰隲文図証」などがのっている。陰隲文本文がまずあり、その注釈文、霊験があったケース、またその図像が描かれている。

演者が持っている中国のものには、「陰隲文注解」（道光十七年、一八三七）と、「陰隲文図」（同治二年、一八六三）のものがある。

台湾では無料で頒布している「文昌帝君陰隲文」がある。

また陰隲文は我が国にも移入せられ、演者が所持しているものに「文昌帝君陰隲文」（和文、発刊年不明）、「通俗陰隲文」（和文、明治十年版）がある。

元来本書はコンパクトのものだが、本文初めに帝曰くとあり、自分は十七代（梓潼帝君は七十三代などといっている）の者であるとあるがその第一代は周武王の時の張名善という医師であったともいわれている。つづく内容は儒教方面からは忠、孝、敬兄、和合、子孫繁栄。仏教方面からは拝仏念経、福田などの言葉があり、さらに広行三教とあって全く三教合一の思想がもられ、「太上感応篇」にあった「諸悪莫作　衆善奉行」という字句も記されている。

総会では内容についてふれたい。